

「上荘ガイド」



発行 研修部会



かこがわ人の会

平成 29 年 1 月 20 日

目次

1、日光山 常楽寺	P 1
2、上之庄神社	P 2
3、美登呂姫の伝説	P 4
4、井ノ口の清水 (いのくちのしみず)	P 4
5、井ノ口城跡と加古川温泉みとろ荘	P 5
6、みとろ苑 (旧大西家)	P 6
7、塔池・長池と大西吉兵衛	P 6
8、国包の町	P 8
9、築山・築山神社・榎	P 9
10、国包の「セイメイさん」	P 10

1、日光山 常楽寺

大化5年(649年)法道仙人の開基とされる高野山真言宗の寺院で、本尊は阿弥陀如来です。

寺域は奥行きがあり、広大です。

古刹にふさわしく凜とした空間が広がっています。

播磨八薬師霊場の第2番札所で「日光山のお薬師さん」として親しまれています。

永仁2年(1294年)伏見天皇から日光山の山号を賜りました。

天正年間、秀吉の三木城攻めの際、堂塔、伽藍すべてを焼失しましたが延宝6年(1678年)再建されました。

境内には、石造物がいっぱいあり石造物に興味のある歴史ファンは一見の価値があります。

入口右側には十基ほど集められている石造物群があり、その中央に町石笠塔婆(ちょういしかさとうば)があります。

それには「自日光寺一丁永徳二八廿南阿」の文字がありますので、永徳2年(1382年)に造立されたことがわかります。日光寺は、常楽寺のことと考えられ、この町石は日光寺から一丁(109m)の所に建てられていたことを示しています。

町石とは、寺社への参道にあつて、そこに至るまでの行程を一丁(町)ごとに示した石の標識のことで、一丁進むごとに聖地に近づくという信仰に基づいて設置されたものと考えられています。

本堂に向かって右側の高台に、石造九重塔があり県の指定文化財です。

現在九個の笠を積んでいますが、元来は十三重塔で6.3mの高さであつたらうと想像され、最上部の相輪はなくなっています。

13世紀末期の作品であらうと推定されています。

境内の四国八十八ヶ所ミニ霊場参道脇池の下には、凝灰岩製の三重塔があり、13世紀前半のものと推定されています。

又、ミニ霊場参道を進み、太子堂近くの護摩堂あとには15世紀前半のものと推定される五輪塔があります。

ミニ霊場は、30～40分で巡礼でき、灌漑用の池が参道、山のそばに数個あり、地元との繋がりが想像できます。

毎年4月1日には、「鬼追い」の行事があります。

春には赤紫色の「みやまつつじ」が全山を彩ります。

2、上之庄神社

主祭神は、素戔鳴尊（すさのおのみこと）、配祀神は、天照大神（あまてらすおおかみ）、豊受媛神（とようけのひめのかみ）、大国主神（おおくにぬしのかみ）、少彦名神（すくなひこなのかみ）、品陀別神（ほんだわけのかみ）、住吉神（すみのえのかみ）です。

創立年は不詳ですが、加古川は昔国包村の東を流れていましたが、嘉禄元年（1225年）洪水による氾濫で堤防が決壊し、国包村は2つに分断されてしまいました。

この国包村が2つに分かれる以前から上之庄神社が、この地域の氏神として崇敬されていたのではないかと考えられています。

又、江戸時代までは神社名も若一王子大権現、明治以降は上之庄神社に変更したのではないかと考えられています。

一の鳥居には寛延3年（1750年）に若一王子大権現に寄進されたことが刻まれています。

ちなみにこの鳥居の寄進者は、あの国包の築山を造った長浜屋新六郎です。

神社、は明治7年（1874年）村社に列せられました。

氏子村は、井ノ口、見土呂、都染、磐東、白沢、国包、厄神、日光口、船町で平荘町、八幡町、上荘町と広範囲にわたっています。

境内には安政5年（1858年）の祭礼絵馬が奉納されて、往時の祭礼の様子が描かれています。

祭礼は毎年10月第2土、日に盛大に行われ、神輿、屋台（5台）、獅子舞他色々な風習が受け継がれて、神社を中心とした人々の繋がりが感じられます。

上荘町はかみそうちょう、上荘小学校はかみしょうしょうがっこう、上之庄神社はかみのしょうじんじゃと呼ばれるのも不思議です。

3、美登呂姫の伝説

見土呂公民館近くの大銀杏のそばに、お姫様の霊を弔う石仏があります。

みとろの地名の由来にもなった美しい姫の悲話が伝えられています。

室町時代のこと、井ノ口城に美登呂姫という、美しく、やさしいお姫様がいました。

家臣の一人がお姫様に好意を抱き、「月見の祝」の席で思いを伝えますが断られてしまいます。

腹を立てた家臣はその場でお姫様を切り殺してしまいました。

その後、お姫様の遺体が発見され、城内は勿論、村中の者が姫の死を悼み、美登呂姫の霊を弔う為、石仏を造ってお祀りしました。

この石仏は、前屈みに立っていますが、これは美登呂姫が倒れる寸前まで、その苦しみに歪む顔を見られまいと下を向いたまま、体を前に屈めたからで、最後まで美を守るお姫様の姿を表したものだといわれています。

4、井ノ口の清水 (いのくちのしみず)

「井ノ口の清水」は、奈良を都に定めた元明天皇が、衣服を染めるために都に持ち帰ったとされる清水です。

このため、別名「都染めの清水」ともいわれており、また播州名所巡覧図絵には「都染井」とあります。

元明天皇は和銅5年(712年)に衣服の作り方を決め

ましたが、官衣を藍色に染める良い水がなく困り果てていたところ、ある夜、夢の中に神が現れ、「播磨の国、印南の堤というところに良い水がでる。

それで染めよ」というお告げを聞きました。

使者が訪ねて行きますと、山裾からこんこんと清水が湧き出ていたので、都へ持ち帰り衣を染めたところ、鮮やかな藍色に染め上がりました。

天皇は大変喜び、「あいにあう 井ノ口の清水なかりせば 都の衣 いかにも染めなん」と歌い伝えています。

都染には、それ以後、染め物を家業とする家ができ、江戸時代まで続き、今も「形屋」や「紺屋」という屋号の家が残っています。

また、清水が湧いていた場所には、小さな堀状の片隅に石の井戸枠が残存しています。

(姫路河川国道事務所 加古川水の新百景No.99より)

5、井ノ口城跡と加古川温泉みとろ荘

秀吉の播磨攻めのころ、井ノ口には井ノ口城がありました。

播磨鑑によりますと、城の規模は本丸 26 間四方、二の丸長 27 間、横 21 間と書かれています。

三木合戦では三木方に属したため、天正 8 年(1580年)三木城落城の時、井ノ口城も落城しました。

城跡には、加古川市で唯一の温泉「加古川温泉みとろ荘」があります。

約 50 年の歴史があります。

泉質は二酸化炭素、カルシウム、ナトリウム、塩化物炭酸水素泉で、神経痛、筋肉痛、関節痛などに効用ありとのこと。

名物料理の「瓦焼き」があり、日帰り客も多数利用されています。

6、みとろ苑（旧大西家）

上荘町の歴史を語るとき、旧大西家を欠かすことはできません。

元々は文化年間（1800 年）頃に、綿花栽培で豪農となった地主、大西家 9 代目に当たる甚一平の別宅として大正 7 年（1918 年）に完成したものです。

当時、凶作に見舞われた人々に仕事を与えるために建てられることになった救済事業で、最良の材を使い贅を尽くしてあり、明石の間は明石城藩主・松平家の茶室を移築したもので、今では再現不可能とされています。

現在料亭として営業されていて、建物、庭園が国の登録有形文化財に指定されています。

7、塔池・長池と大西吉兵衛

上荘町の見土呂辺りは山地で、加古川から灌漑用の水を引くことはできません。

山の谷に小さな池を造り農業用水に利用していました。慢性的な水不足で十分な稲作はできませんでした。

そんな農民の苦勞を見て、見土呂の大庄屋の「大西吉兵衛知雄」が文政から天保時代にかけて、山の谷の小さな池を改修して農業用水を確保し、村人から感謝されました。

塔池（とうのいけ）は「みとろフルーツパーク」の北側にあります。

見土呂、都染、井ノ口の各村は、北が山地で常に水不足に悩んでいました。

吉兵衛は山地の水を 3 個の池を繋がないで水を溜めることを考えました。

新池、塔池、下池です。勿論中心は塔池です。

計画から 10 年かかり、文政 17 年（1827 年）ごろ完成しました。

工事完成により、見土呂、都染、井ノ口の田んぼを潤しました。

後に三村の村人が感謝と吉兵衛の功績を称え、池の北の端に顕彰碑を建てました。

塔池の完成後の見土呂、都染、井ノ口の田畑を見た小野村の村人は、小野村にも池を造ってくれるように吉兵衛に頼みました。

吉兵衛は、すでにあった小さな長池（ながいけ）を改修することを考え、天保元年（1830 年）長池が完成しました。

池の水は山を下りながら小野村の田んぼを潤しています。

そんな長池は、現在加古川市で一番美しい池として、地域の人々の憩いの場として大切に守られています。

池の近くに広場があり、桜の木が植えられ、水鳥観察舎のある広い公園になっています。

小野村の人々は、吉兵衛への感謝と功績を称え、村の中の薬師堂の東側に顕彰碑を建て、石碑の側面に吉兵衛と水の恵みに感謝する文が刻まれています。

塔池も長池もその顕彰碑の正面には、どちらも「本法壽覚居士」の戒名が刻まれています。

8、国包の町

嘉禄元年（1225年）加古川の大洪水で国包村は、家も田畑も流れ河原となり、住人は川の東岸に移ったということです。文禄3年（1594年）からの加古川の舟運の発達により、上流から運ばれてくる木材、酒米の集散地として、又湯の山街道の宿場町として栄えてきました。

大正初期に刊行された印南郡誌によると国包は、唐箕（とうみ）の産地として有名と書かれており、加古川上流から運ばれてくる木材から、木挽きをし、唐箕を作り始め、江戸時代の1825年頃から建具へと発展して大正時代には、30軒の建具を作る家があったということです。

建具の技術は代々受け継がれ、昭和51年（1976年）国包の建具は兵庫県の特産の指定を受けました。

その独自のデザインと確かな技術は全国的に有名で、姫路城の欄間などにも使用されています。

9、築山・築山神社・榎

昔、上荘町の国包地区は洪水時の浸水被害が大きかったそうです。

現在地図を見ると、国包は加古川の右岸にも左岸にも存在する不思議な地区です。

かつて「暴れ川」だった加古川によって分断されたものと言われています。

江戸時代、国包出身の長浜屋新六郎という商人が大阪で成功し、財を成しました。

洪水で被害を受ける国包の村人を救う為に、宝暦6年（1756年）、私財を投じて村に丘を築きました。

人の手で築かれた丘（山）であることから築山と呼ばれ（大きさは、縦36m・横20m・高さ3mくらい）後にその丘に人々の手により、築山神社が建てられました。

長浜屋新六郎への感謝の思いと、安全への祈りが込められた神社です。

以前、丘の上には2本の榎が1本の棕の木を挟むように生えており、3本の木が遠くから見ると1本の大木のように見えていました。

3本の幹回りは約7mもありました。

3本の木は「国包の榎・棕の樹」と呼ばれ、推定樹齢250年という歴史的な由緒もあり、加古川市指定文化財でした。

ところが平成24年4月の暴風により、北側の榎と棕が折れてしまいました。

椋がなくなってからは、残された南側の榎は、コンクリートの支柱でささえられ、しっかりと守られるとともに「築山の榎」と呼ばれています。

昔と違い、加古川の堤防が決壊することはないと思いますが、全国的に水害が多い今日このごろ、万が一の時には築山が国包の人々を救ってくれるでしょう。

10、国包の「セイメイさん」

陰陽師といえば安倍清明（あべのせいめい）。

そして、加古川で生まれた芦屋道満（あしやどうまん）。

清明と道満はライバルだったと言われています。

国包には清明に関する場所があります。それは地元の人が「セイメイさん」と呼んでいる石像です。この石像は厄神駅を造る際、土の中から掘り出されました。

安倍清明の術がかかっているという言い伝えがあり、セイメイさんと呼ばれるようになったそうです。

また青面（せいめん）さん、青面金剛（せいめんこんごう）さんと呼ばれていたという説もあります。

どんな病気でも治してくれるといわれており、古くはマムシ除けの神様として大切にされていたとのことです。

この地域の小学生は2年生になったら地元の歴史を学びます。

「国包探検」で建具屋さん、セイメイさんなど見学するそうです。

古い小屋のなかで静かに佇むセイメイさんの前には、お酒や花などがいつもお供えされており、地域の人に大切にされているのがうかがえます。